

シャーレのマゾいじめ当番 トリニティ編  
サンプル

・プロローグ

ここ最近のキヴォトスは、恐ろしくくらいに平穏だった。目立った騒ぎもない。生徒に関するトラブルもない。街中で謎の超巨大生物が暴れるだとか、そういう突拍子もない事案も起る心配がない。いつもは何かしらの騒ぎを聞きつけて出勤しているクロノス報道部のヘリも、ここ最近はその音すら聞こえてくる心配がない。そのくらい平和だった。

「ひとつまずいことと言えば……まあ、私の健康ぐらいなものかあ」

シャーレの先生は仮眠室のベッドの上でまどろみながら、そんなことをぼんやりと考えた。目を擦りつつ目覚まし時計を止める。時刻は午前の七時を指していた。昨日も夜遅くまで仕事をしていたために、あまり眠れていない。日々の不摂生……この前セリナにこっぴどく怒られたことが思い出される。先生は重たい体を起こし、身支度をしてシャーレのオフィスに向かうことにした。自分の健康が犠牲になって

も、生徒がのびのび生活できるならそれがいい、その思いが先生の背中を押していた。

その日の当番生徒は、件の生徒、鷺見セリナだった。

\* \* \* \* \*

時計が午後二時の来訪を告げた。本日のシャーレの当番生徒——トリニティ総合学園の鷺見セリナは、黙々と書類の整理をしている。先生はまた健康のことで怒られるのではないかとそわそわしていた。また二時間お説教コースはごめん被りたい……

「先生、込み入ってお話が」

書類の整理をひと段落つけたらしかったセリナが、回転式のチェアをぐるりと半回転させて、こちらに瞳を向けてきた。ついにこの時が来たかと、先生は観念してセリナと向き合う。「安心してください、今回は健康のことではありませんよ」セリナは若干呆れ気味にそう口にした。先生は自分の考え

が読まれていたことに驚く素振りを見せつつも、目の前にいる生徒が驚見セリナ——なぜか私の考えを見通せてしまふ、不思議な生徒——であることに思い当って、すぐさま居直った。

「じゃあ、何のこと？」

恐る恐る先生が聞き返すと、セリナは鞆からそれなりの厚みがある資料のようなものを取り出した。

「では、説明させていただきますね」

セリナはにこりと笑ってそう言った。

一枚目の資料のタイトルの部分には、「シャーレの先生の業務環境改善についての提案」と書かれていた。

「先生、とてもお忙しそうですね……このようなものを作らせていただきました」

先生の身体がこわばる。生徒の青春が第一。そのための自己犠牲とはいえ、肝心のその生徒に心配されるようでは意味がない。

「なんだか申し訳ないなあ、セリナにこんなことをさせちゃって……」

先生は思わず、そう口から漏らす。生徒に負担をかけたく

ないから、やんわりと断りたいという意思が、その言葉にはこもっている。

「……させてしまふ、じゃなくて、私たちがしたいんですよ、先生」

セリナがじりじりと身体をこちらに寄せてくる。

「先生は自分の好感度を甘く見積もりすぎです。先生の健康のために時間を割きたいと思えるほど、私を含め生徒のみんなは先生を慕っているんですよ？　それが生徒のやりたいことであるならば、先生は大人としてそれを止めようとはしないですよ？」

もっともらしい言い分だった。少し圧のあるセリナの様子は、「こういう言い方でもしないと、先生は私たちの助けを得ようとしなんでしょう？」という主張を暗に示しているようだった。先生は申し訳なさに、そしてセリナの申し出を受け入れるように、資料をゆっくりとめくり始めた。

内容には、これまで生徒に簡単なものしか頼んでいなかった当番業務の書類作業をもっと分担するとか、先生の睡眠時間の管理を救護騎士団が受け持つとか、とにかく生徒ができる範囲で先生の仕事をサポートする旨が盛り込まれて

いた。なるほどよくできているとは思っても、この書類は自分の至らなさを示しているようなものにも見えて、先生はなんだかいたたまれなく思った。とにかく最後まで目を通してと思い、流し読みしていくと、「シャーレ当番の慰安業務について」という題目の箇所が目についた。

「慰安……慰安!？」

思わず声が出てしまう。慰安と言うと……要は自分のために、生徒が文字通り一肌脱ぐということであって……

「はい、慰安業務です。先生、一人で解消する時間もなくて溜まっているようでしたので、お手伝いできたらなと!」

セリナはさも当たり前のようにそう告げる。元気が良い。それは良いことだ。しかし……

「いや、いくらなんでも、流石にこれは……」

「これも含めて、私たち生徒がやりたいこと、先生にしてあげたいことです」

「みんな忙しいし、時間を取らせるわけには……」

「夏休みの期間を利用して、ちよつとずつ取り入れていこうと思っています」

「でも、みんなそういう知識がないのでは……?」

「知識ならありますよ。先生の本から学びましたから!」

「えっ」

「あ、えっと、今回の提案によって当番のお仕事の中で慰安の業務を担当する生徒は、試験的にということで事前に決めていたトリニティの生徒数人なのですが……その生徒はみんな、先生の……その、えっちな本から知識を得ているので、ある程度はご満足いただける奉仕ができるかと」

「その本、どこから?」

「ええと……本棚の裏に隠してあったものを、これもお勉強だという事で、こっそりと……すみません」

なぜ場所がバレているのか、セリナの不思議な力のことを考えると、先生はあまりその点は不思議には思わなかった。しかし、しかしながら――

「ぶ……プライバシーの侵害っ……!!」

先生の悲痛な叫びが、シャーレのオフィスに響く……

「とにかく、慰安については認められないよ。倫理的にいろいろと問題がありすぎる……」

セリナになんだかんと言われたが、結局はシャーレの当番業務についての話。先生が首を横に振ってしまえば、それが

通ることはない。なんだかわがままを言っているようだが、流石にこの申し出を通すわけにはいかない……先生の本能が、そう告げていた。

セリナは少しばかりの間しゅん、としていたが、急に何か意を決したように立ち上がると、

「こうなれば……最終手段です」

そう言って、身体を先生の方へとすり寄せた。

「先生が隠していた、たくさんの本、隅々まで読ませていただきましたが……なんだか、男の人が女の人にいじめられる内容が多かったように思います」

先生はひゅっ、と息を飲み込む。そして、自身の性癖まで生徒に看破されているかもしれないことを思っただけの絶望を覚えた。実際、本の内容は男性が受けに回っているものばかりで、詰まるところ先生はどちらかといえばマゾヒズムの気があった。

「そんな本で知識をつけてしまった生徒たちによる奉仕……どんなことが行われるのか、ある程度想像がつくのではないですか？」

急にセリナの声色が変わった。男を興奮させるために発せ

られるような甘い声。先生は目の前の生徒が、突然一人の女性に変わったような感覚になった。

「自分より小さくて、清楚な女の子に、えっちないじめを受けて……びゅっ♡ びゅーっ♡ って白いおしっこ、おもらししちゃうシチュエーション……体験してみたくはありませんか？」

セリナが耳元でささやいてくる。先生の中で、心臓の鳴る音がうるさいくらいに響き始める。先生はついさっきまで対等に話していたはずの生徒の責めで、確かな興奮を覚えていた。

「いやっ……♡」

「何がイヤなんですか……♡ ここ、こんなに元気そうにさせて……♡」

セリナが先生の股間の膨らみを優しくなでる。先生の身体が小さく震える。

「慰安業務を行う当番生徒は、さきほど言った通り、初めはトリニティのみなさんを予定しています、そうですね、マリィさんとか、ハナエちゃんとか……♡ あとは、私とか♡」先生は想像してしまった。いつも対等に接している生徒に、

性的に責められる妄想……頭がのぼせるような心地がした。  
「キヴォトスでの未成年淫行は、犯罪ではありませんし……  
♡」

また、先生の判断を鈍らせるような台詞。セリナはその間、先生の逸物をなでるばかりで、快感を得ることができるような刺激の強さは与えない。セリナの「焦らし」に先生は声が漏れてしまっている。このくらいのスキンシップでたじろいでしまうようでは、自分がマゾであると宣言するようなものだ。

しばらくセリナの「焦らし」は続いた。セリナが満足そうに先生の股間から手を離すと、「認めてもらえますか？」と、誓約書のようなものを先生に差し出した。「判を押していただければ、もっとしてあげますよ♡」とでも言わんばかりだった。もはやそこに理性的な思考が入る余地はなく、先生は急いでハンコを取り出して、誓約書にそれを押した。

セリナは判を押した誓約書を受け取ると、

「みーんな先生のが大好きな生徒ばかりですから、楽しみにしておいてくださいね♡」

そんな言葉を添えた。

平穏が静かに崩れる音がした。ただ少しの後悔と目いっぱい欲望が、先生の頭の中で満ちていた。

「書類上での名称は、「夏季期間の臨時当番業務」となっていますが……少しまどろっこしいですから、便宜上、マゾいじめ当番、と呼ぶことにします♡」

こうして、「夏季期間の臨時当番業務」、もとい、「シャーレのマゾいじめ当番」が施行されたのであった。

・サンプル…伊落マリーの場合

「……おい、マゾ♡ 腰へコやめろっ♡ ちんちんぴくつかせるの我慢しろ……♡」

マリーの語気が強まる。「ま、マリー!」と、急な豹変に先生も驚く。

「突然すみません、こういう言いかたも、先生に悦んでもらえるかと思ったので……♡」

実際のところ、先生のペニスは命令口調による責めに敏感に反応してしまっていた。

マリーによる奉仕はまだまだ続くようで、マリーは持ってきていた自身のカバンに手を伸ばして何やら取り出し始めた。

「はい♡ こちら、オナホールとローション、です♡ 性技にはあまり自信がないので、道具の力をお借りしようかと♡」

透明の液体がオナホールの穴に注がれる。そのままマリーがそれを握って馴染ませる様子は、ひどく官能的だった。

「ですが……さきほどの様子だと、オナホールの刺激をまとも感じてしまっは、すぐに……あんあん♡ いくいく♡♡♡ ってなって、びゅるびゅる♡ どぶどぶ♡ と、白

いおしっこをおもらし♡ してしまうかもしれません♡ ほら、指を入れてみてください♡ このひだひだが先生のおちんちんに絡みついて、じゅぽじゅぽ♡ と、精液を搾り取ってくるんです♡ 先生の敏感マゾおちんちんでは、どうやったって勝てない気持ちよさですよ♡」

マリーに促されるまま、先生はオナホールの中に指を入れて、ローションをまとったひだひだの上で指を走らせる。「これにおちんちんが入るんですよ♡」と、マリーがささやく。「それと、男の人のからだのことにはあまり詳しくありませんが、先生のおちんちんは皮を被っている状態、いわゆる包茎、というやつなのですよね? なんでも、理想のおちんちんと比べれば、少し恥ずかしい状態なんだとか……♡」

マリーはひたすらにその興奮を高めていき、先生を責め立てる。そして、マリーはくす♡ と笑いながら先生の顔をじっと見つめる。マリーが満を持したように、オナホールの口を先生のペニスの亀頭にあてがうと、先生はもう我慢できずに腰をマリーの方へと寄せようとした。それをマリーに手で押さえられて止められる。

当然、先生の身体はまったく動かず、どうにか必死に腰を

動かしでも、オナホールには届かない。焦らされている。焦らしている。

「まだダメです♡　いくら興奮したからといって、必死に腰をへこへこ♡　して、待て、もできないようでは、いつまで経っても情けなしい♡　包茎マゾおちんちんのままになっ  
てしまいますよ♡　気持ちよくしてほしかったら、おちんちん気持ちよくしてください♡　って、ちゃんとおねだりできません♡」

\* \* \* \* \*

・サンブル…朝顔ハナエの場合

「やはり、質のいいおちんぽになるためには、質のいいオナニーが大切です♡」

筋が通っていきそう、いなさそうな理論を振りかざしながら、ハナエはブラジャーのホックを外し始めた。ぶち……ぶち……と音が鳴り、ホックが完全に外れると、ハナエの豊満

なおっぱいがどぶん♡　と揺れて、ハナエの首元からブラジャーがずるりと取り出された。

「先生の本から、男の人はおっぱいの匂いでも興奮してしまう、ということを学びました♡　それが私のおっぱいでもそうなのかは確かではないですが……はい、先生♡　これをどうぞ♡」

ハナエから先生にブラジャーが手渡される。ハナエの小さくて可愛らしい巨軀からは想像できないほど、紫色の大きなブラジャー。まだハナエの温もりが残っていて、裏側にはハナエの汗が染み付いている。それがどうしようもなく先生の興奮を煽った。

「は、ハナエ……♡　これ……♡」

「いいですよ♡　ハナエのおっぱいの匂い、いっぱい吸って、いっぱい興奮しましょう♡」

さながらご馳走を前にした育ち盛りの男児のように、先生はハナエのその言葉を聞いた瞬間、ハナエのブラに顔を埋めて、そのまま深く、息を吸った。

「すっ……♡　すう……♡　すーっ♡　すーっ♡」

「わわ、すぐ必死ですね先生……!!　でも、それだけ気に

入ってくれたみたいで、よかったです♡」

必死さを取り繕うことは、今の煩惱まみれの先生では難しい。先生はすっかりペニスを膨らませて、本能のまま腰をこへこ♡ と動かす情けないマゾ仕草を、ハナエの前で披露してしまう。

「おちんちんも元気になったみたいですし……このままオナニー、始めていきましよう♡」

そのままシャーレのオフィスの中で、マゾいじめ当番の仕事が始まる。開けた場所でこんな淫らな行為が始まってしまいうインモラルさに、先生のペニスはさらに固さを増していく。ハナエに言われるがままに、そのまま先生はズボンとパンを脱ぎ捨てて、椅子に腰かけ、チンポを握りしめ、オナニーを始める。

\* \* \* \*

・サンプル…若葉ヒナタの場合

ヒナタは腕を後ろで組んで、豊かな胸を先生の方へと突き出す。ぶるん♡ と発育のいいおっぱい、ちようどいいところに空いた穴……こんな誘い方をされたら、「バイズリ」するしかない。勃起したペニスをこの穴に突っ込んで、ヒナタのおっぱいを好き放題使って、身勝手に気持ちよくなる腰へコバイズリを。

先生はいそいそとズボンを脱ぐ。マゾおちんちんはヒナタのフェロモンを嗅いだ時から勃起し続けていた。ヒナタはまろび出たそのペニスに初めは驚いたような素振りを見せたが、次第に愛しいものを見つめるように目を細めた。先生のおちんちんの小ささに、ヒナタがそれを「可愛らしいもの」と無意識に下に見ているのは明らかだった。

先生はそのまま、ヒナタのおっぱいへと手を伸ばす。ふにっ♡ と指が触れて、そのままにゆうう♡ と沈んでいく。ハナエのおっぱいはもつと張りがあったが、それと比べるとヒナタのおっぱいは恐ろしいほどに柔らかく、まさにマシユマロだった。



むに……♡ むに……♡

ふにゅ♡ ふにゅん♡ ふにゅ♡

もみつ♡ もみもみ♡ むにゅっ♡

先生は夢中でヒナタのおっぱいを揉み続ける。ヒナタはそのすべてを受け入れる。おっぱいの感触はひたすらに先生の興奮を高め、先生は無意識にエア腰へコをしよう。パイズリに入る前に射精してしまいそうな勢いだった。

「これからおちんちんがぬぶぶ……♡ つて入るおっぱいおなほーる♡ ですから、丁寧にもみもみ♡ もみもみ♡ つてして、ほぐしていくのは大切なことです♡ 良い調子ですよ、先生♡」

ヒナタの口から出てくる、普段の様子からは考えられないような、男を煽る淫語。若干言い慣れていない感じも、いかにもヒナタらしい淫語煽りでむしろ興奮が加速していく。先生はおそろおそろ、ヒナタの体操服のグローリーホールにペニスをあてがう。ぶに♡ と亀頭のあたりがおっぱいの柔らかさに晒された瞬間に、とろけるような快楽が染みる。既に刺激が強すぎる。なかなかおっぱいに挿入できない。

・サンプル…驚見セリナの場合

セリナのフェラ。口の中は生温かい。舌がペニス全体に絡みついてくる。その舌が陰茎の皮を剥いたり、戻したり、むき出しになって敏感になった亀頭を撫でたり。あまりにも上手すぎる。あまりの気持ちよさに先生が思わず腰を引こうとすると、セリナは逃がすまいと先生の太ももを掴み、いつそう深くペニスを啜える。喉奥まで先生の短小おちんちんを吸い込んでしまいそうなほどの、強烈なバキュームフェラ。

じゅぽっ♡ じゅぽっ♡ じゅるっ♡  
じゅるるるっ……♡

激しい前後運動が淫猥な水音を生む。セリナのよだれが床に垂れる。快楽のみをひりだそうとする、下品なフェラ。セリナの整った可憐な顔がフェラによって歪む。セリナのぶにぶにの唇がちんちんの根元に触れる度、甘い快楽が先生の身体を突き抜ける。水音、快楽、ピストン運動、また水音……まさに天然のオナホールといった感じで、先生は快楽を詰め込まれ続けて、ただただ悶えるしかなかった。

「うわあっ……♡」

ぐっぽ♡　ぐっぽ♡　ぐっぽ♡

くぽ♡　くぽ♡　くぽ♡

じゅぶっ♡　じゅぶっ♡

じゅぽっ……♡

れえ……♡

時折セリナはペニスから口を離すと、舌先で尿道をいじくってくる。精子を吸い取られるような、バキュームフエラによる激しい快楽の間に、挟み込まれる緩急。セリナはそんな責めの間も、じーっ♡と先生の瞳を見つめている。目元を細める様子から分かる。その顔はフェラの直前に先生に見せた、意地悪そうな笑顔そのものだった。いつものセリナの立ち居振る舞いからは、考えられないような悪い笑顔。マリィやハナエの時にも見られたギャップ。相も変わらず、それが先生の被虐心をひたすらくすぐった。